

オーストリア帝国幻想と生の哲学 ——ホフマンスタールの第一次世界大戦

青 地 伯 水

第一次世界大戦が始まって四ヶ月あまりが過ぎた頃、ホフマンスタールの身にそれまでの彼の中部ヨーロッパ世界観を揺るがす事件が起こっていた。シュテルンの報告によると、

1914年、ホフマンスタールは劇場支配人のヤロスラフ・クヴァピル、翻訳家パーヴェル・アイズナー、ゲルマニスト夫妻オトカルとブラジェーナ・フィッシャーらのチェコのインテリたちと知己をえて、彼らを含めた人々に二つの愛国的出版物のための援助を得ようとした。その後、実現したインゼル出版の26巻本『オーストリア文庫』とまもなく計画の段階で頓挫する写真集『オーストリアの顕彰地』である。両出版物は多民族国家の統一に賛意を示すオーストリア全体の表明と考えられていた (Stern257)。

ホフマンスタールはオーストリア・ハプスブルク帝国を讃え、その中欧全体における繁栄をチェコ人までもが歓迎するとナイーブに考えていた。ところがチェコ人の腹の内は異なっていた。それゆえクヴァピルはホフマンスタールに、1914年11月16日の手紙で、その後、口頭でもって真意を告げてきたのであった。

彼らにとってはオーストリアは独立を奪い、17世紀来チェコ・スロヴァキア民族の国民的アイデンティティの発見を妨げる覇権であり、もはや将来のパートナーではなかった。この戦争における敗北が彼らに建国されるべき国民国家における自由をもたらすのなら、中部ヨーロッパ諸国の敗北にさえ甘んじたのであった。(Stern257)

オーストリア帝国がたとえ一敗地にまみれようとも、その旗印の下に戦うチェコ・スロヴァキア人の軍隊が敗北を喫しようとも、彼らの独立国建国が実現するのなら、問題ではなかった。民族自決による国民国家チェコ・スロヴァキアの独立こそが、彼ら文化人の宿願であった。

この事実はホフマンスタールにとって少なからずショックであった。しかしこの体験によりホフマンスタールの世界観が大幅な修正を強いられたということはない。彼は決して民族自決に追

従することなく、多民族の共生を唱道した。多くの民族がひとつの国家を形作る政治形態に彼は中部ヨーロッパの理想像を見出していたのであった。

1990年代のセルビア紛争をマスメディアを通じて、同時代の悲惨で忌まわしい出来事として見聞し、人種・民族という非科学的で曖昧な概念に基づく国家よりも、社会契約によって結ばれた国民概念のほうが有効なことをわれわれは知っている。また中部ヨーロッパが西ヨーロッパと手を取り合い、周辺地域をも取りこんだヨーロッパ全体がEUとなった。そしてこの多民族共同体は経済的にのみならず政治的にも共同し、一体化を目指す動きが今や現実となっている。それだけにホフマンスタールの第一次世界大戦時の中部ヨーロッパ世界観を検証することは、その後のドイツ・オーストリアの運命的な崩壊現象を思想的に解明する一端となるであろうし、また今日的なアクチュアリティをももっている。

1. 「神によって望まれた」多民族の共生

大戦が始まった翌年、1915年ライプツィヒのインゼル出版から『オーストリア文庫』が上梓されるはこびとなった。ホフマンスタールはその第一巻『グリルバルツァー選集』を編集し、序文として『グリルバルツァーの政治的遺産』という小論を寄せている。

ここでホフマンスタールは、「困難な時代には、思索するオーストリア人は必ずグリルバルツァーに帰って行く」(PIII 252)とのべ、戦争時代におけるグリルバルツァー文学受容の必然性を主張し、その二つの理由を挙げている。

ひとつ目の理由はこうである。グリルバルツァー作品の中で、現在のオーストリア人がはるか先祖のもとに戻ってゆき、「私たちのうちにもある不壊なるものを確かめること」(252)ができ、これらの作品世界を「避難所」(252)にできるからである。オーストリア人にとって永遠の宝ともいべきものが、グリルバルツァー作品の中で守り継がれているとホフマンスタールはいう。

ふたつ目には戦争で抑圧された生活を強いられた時代には、オーストリア人は、普段なら見逃してしまうのだが、困窮の中でかえって炯眼を養い、グリルバルツァーの中で「その心の動きの鋭さと細やかさに」(252)驚くほどの、「純粋でオーストリア的な自己の刻印に出会う」(252)ことになる。かりそめのものやにわかになに受け入れたものは、身からはがれて、「誰もが自分自身に戻らねばならない」(252)、とホフマンスタールはいう。このようにオーストリア国民が自己の中にあるオーストリア性に目覚める時代こそ、グリルバルツァー作品を読むにふさわしいからである。

ホフマンスタールによると、グリルバルツァーは政治家ではなかったが、ゲーテやクライストと並んで、「政治的な人物」(252)であった。彼はイデオロギーを振り回すような人物ではなく、「オーストリア人であり、ある意味で現実政治家」(253)であった。彼は「この古い生氣あふれる国家像、彼のオーストリア」(253)を愛しており、「それを鋭い政治的思考で満たしていったのだった」。(253) 政治家とは異なる政治性をもったグリルバルツァーは、当時現実政治に生き

た人々にとっては、「死んでも同然の人間」(254)であった。しかし数十年の時は流れて、人の命は絶え、いつきの政治性は滅んでしまう。ところが「今ももちろん彼は生きており、他の人々は死んでしまった」、(254)とホフマンスタールがいうように、グリルバルツァーのオーストリア理念にもとづいた政治性は、未だ議論の焦眉の対象となっていた。

ホフマンスタールは、グリルバルツァーの政治的遺産が現れているのはとくにドラマであり、これらのドラマを貫く偉大なテーマは、「支配することとされること、そして正義」(254)であるという。グリルバルツァーの心情と想像力は「支配者と民衆」と絶えざる関係を結んでいる。グリルバルツァーの中にある「深い意識」(254)が彼自身をこの両者に変貌させていくのだが、「彼は本質的には民衆であり、夢想の中では支配者である。民衆や支配者に変貌する中で、彼はオーストリア的性質の中の特別なもの、強さ、辛抱強さを展開した」(254)といわれている。

グリルバルツァーはマリア・テレジアとホフマンスタールの間の時代を生きた人物である。彼の性質はその両時代に適合し、「両時代に生き生きと属する要素である」(256)ので、ホフマンスタールの同時代人に、二〇〇年に近い長年月を貫いている「不壊のオーストリアの本質の概念」(256)を教えてくれる。

特にオーストリアらしい精神性の中で、オーストリア人の心情に榮譽を与えてくれるのは、「幽玄な深みではなく、明晰さであり、現在」(257)であるとホフマンスタールはいう。ドイツ人が、「おそらくもっとも時間について語る民族であり、現在の意味を求めて格闘する」(257)のは、彼らがそもそも「ここにいながら、心ここにあらず、時間にかまけてこの時を生きていない」(257)からである。その点オーストリア人の「明晰さ、現在性」(257)は「ハイドン、モーツァルト、シューベルト、シュトラウスの音楽から流れ出る幸福感の秘かな源」(257)となって、ヨーロッパ中をのみ込んでいる。

もうひとつグリルバルツァーの文芸を特徴づけている要素として、「自然な利発さ」「まったき素朴さ」(257)が指摘されている。それに加えて、「プロイセン的な巧みさと弁舌の自信」(258)の対蹠物として、憂鬱質を思わせるほどの「表現のたどたどしいまでのつつましきさ」(257)があげられる。ホフマンスタールはグリルバルツァーに見られるこの表現の誇張を許さない「中庸(das Gemäße)に対するオーストリア的感覚」を「われわれのもっとも繊細な文化に浸った中世数世紀から受けついで美しい嫁資」(258)と呼ぶ。

そしてこの中庸こそが「多民族の共生の可能性」(258)を実現してきた。この多民族国家を実現する寛容なヴァイタリティーこそが、オーストリア人に困難な時代を生きぬけるようにし、また彼らが次世代へと伝えねばならないものである、とホフマンスタールは述べている。グリルバルツァーの「内奥の心情」(258)に近いのは、シュタイアーマルクの人々、チロルの人々と同様にスラヴのベーメンやメーレンの人々である。つまり一定の自治を有する世襲地やベーメンが属しているオーストリアは、「高次の不壊の統一体」(258)であり、グリルバルツァーにとっては「神によって望まれた」(258)状態であるとホフマンスタールは述べている。多様なスラヴ民族との共生を神の御心にかなうものと見なすことが、グリルバルツァーの政治的遺産である。

2. 中部ヨーロッパにおける使命

1915年1月10日ベルリンの『フォス』紙に掲載されたホフマンスタールの『われわれオーストリア人とドイツ』(1915)は、リデによると「ドイツ人にオーストリアの特殊性とその中部ヨーロッパにおける使命の必然性を納得させる」(Rider243)ための記事といわれている。

ホフマンスタールによれば、「ドイツ人の精神のまなざしは、中世には南に向いていたが、16世紀以来西に向けられている」(PIII 226)。そしてドイツは同時に北のスカンジナビアの国々や東の隣国ロシアとも関係を結び、文化的な交流をおこなってきたという。ところが「地理的な近さや種族の近さ」(226)や「精神的な文化の見た目の共通性」(226)にもかかわらず、ドイツ人はオーストリアについては「アルプス地方、バイエルン植民」(227)、そしてウィーンを知っているくらいなのである。そんなわけでドイツ人は「ウィーンをオーストリア」と見なしたり、「ウィーンらしいものをオーストリア的」(227)と考えたりしがちである。つまりドイツ人にとって、オーストリアは近くて遠い国であるとホフマンスタールは考えている。

しかし「オーストリアを古いドイツ帝国の一部と見なすなら、ドイツ人にとってオーストリアは自明に存在するものではなく、未解決の課題」(229f.)であり、それも「ヨーロッパのドイツ精神にたてられた特別な課題」(230)であるとホフマンスタールは述べる。にもかかわらず、オーストリアが必要としているのは「ドイツ精神の流入」(230)であって、「ドイツの政治力の介入を必要とはしない」(230)という。

「オーストリアは東方と南方には与える国であり、西方と北方からは受け取る国である」(231)とホフマンスタールは述べている。そしてオイゲン王子(筆者註 1663-1736 フランスの王子の子息であったが、聖職につけられることを嫌いウィーンに来る。数度にわたるトルコ戦争を含めて、多くの戦功を立てる。)こそが「オーストリアがヨーロッパから受け取って自分自身のものになることができた最高のもの」(232)なのである。しかし軍隊を再編成し、トルコを退けたオイゲン王子は、西方からとはいえ、ドイツではなくフランスの出身である。レッシングはオーストリアに来てくれなかったし、クライストの滞在は短く、ゲーテはオーストリアを横切ったに過ぎなかった。またフリードリヒ・シュレーゲルやツァハリス・ヴェルナーやフリードリヒ・ゲンツ(筆者註 1764-1832 プロイセンの政治家であったが1803年より、ウィーンに移り、ジャーナリストとして反ナポレオンの論陣を張る。)は「最高で最も純粋なドイツの本質ではない」(232)。

それではオーストリアに流入した「最高で最も純粋な」ドイツ精神とは誰を指すのであろうか。ホフマンスタールによるとそれはベートーヴェンである。ベートーヴェンはオーストリア人がドイツから受け取ることのできた「唯一偉大な精神の贈り物」(232)である。そしてベートーヴェンをオーストリア人が受け取ることができるのは、「われわれの血族の血、すなわちハイドンとモーツァルトの血でもって先払いをしておいた」(232)からだという。オーストリアはドイツより「ドイツ人の魂の深さ」(233)を受け取ったのである。なるほどこのように結論として、オイゲン王子とベートーヴェンという他国から来てオーストリアで活躍した代表的人物をあげて、

オーストリアが西方と北方のヨーロッパから受けた精神的影響を象徴化している。

にもかかわらず、オーストリアに対するドイツ人の認識は上述のように充分ではない。このようなオーストリアに対するドイツ人の無理解を改めるためには、オーストリアを「硬直し形成されたもの」(227)と見なすのではなく、「生成変化するもの」(227)として捉え直さなければならないとホフマンスタールはいう。「ドイツの歴史全体を現在として活気あるまなざしで捉えるとき、現在のオーストリアの存在全体が明らかになる。」(227)

しかしむしろこの記事の論述で注意を引くのは、東方並びに南方に対してオーストリアがとってきた関係である。実のところオーストリアの「帝国議会や州議会の政治的現在」(228)は、「スラブ人先住民にゲルマン人が入植する大胆さと危険性」(228)を示している。ホフマンスタールはドイツ語に思えるような地名であっても、それらの語源がスラブ語であるという現実を指摘する。「このわれわれの地図は、生の根源自体から一緒にわき上がってくる内面的必然的なわれわれの困難さへの真の注釈である」(229)と述べている。ホフマンスタールは、21世紀の世界観からすればスラブ語で記されるべき地名が、ドイツ語に置き換えられていく事態を、「困難さ」を伴っているとはいえ「必然」であると見なしている。つまりホフマンスタールはスラブ語圏である東方へのゲルマン人の進出を是認しているのである。

他方、ホフマンスタールは対トルコ人防衛戦争においてオーストリア軍が果たした役割の重要性とともに、中部ヨーロッパにおける反トルコ勢力結集の意義を力説する。「アジアの敵に敵対して、あらゆる中部ヨーロッパの軍勢をまとめ上げるという状況がなかったなら、オイゲン王子からラデツキーをへて今日に至るまで皇帝軍が維持している構造を身につけることができなかつたであろう」(229)。オーストリアは、東のトルコ軍ひいてはアジアに対して、中部ヨーロッパ勢力をまとめ上げるという役割をつとめ、それによってドイツ人へのさらにはヨーロッパ全体へのアジアに対する防壁としての機能を果たしたという。

つまりホフマンスタールはオーストリアを中部ヨーロッパの盟主と見なし、スラブ系諸民族との平和的共生は、オーストリアなしにはあり得ないと考えていた。そしてその一方で彼は、オーストリアがアジアに対峙することで、ヨーロッパ全体にも恩恵を及ぼしていると見なしていた。

3. オーストリア帝国のヨーロッパにおける必然性

『オーストリアの理念』は、ホフマンスタールが1917年11月15日にウィーンのフランス語雑誌『オーストリア』に発表した『オーストリアの使命』を、ドイツ語で12月2日に『新チューリヒ』紙に発表した小論である。

ホフマンスタールは、「国政上の手腕の大きな目的は存続であるはずで、それは他のすべてを埋め合わせる」(PIII 402f.)というマキャヴェリの言葉をひいて、数世紀にわたって存続するばかりか「歴史のカオスとカタストロフから再三再四若返った顔つきで現れてくる」(403)オーストリア国家の偉大さを物語る。つまりオーストリアは神聖ローマ帝国の辺境として1100年、ロー

マの辺境植民地として2000年の歴史を経ており、「その理念はある場合にはローマ皇帝たちに、別の場合には帝国の後継者カール大帝に由来」(403)し、この理念の本質は数世紀の時のものでは微動だにしない、という。

それではオーストリアの理念とはいかなるものなのか。それはすでに『グリルバルツァーの政治的遺産』や『われわれオーストリア人とドイツ』において語られてきたことであるが、オーストリア帝国は、半アジアあるいは半ヨーロッパであるスラブ世界とヨーロッパとのあいだの「辺境地帯であり、国境の壁」(403)である。一方においては植民地政策として「文化の波を東方へと移植していく」(404)のであり、他方においては「西方へと志向する反対の波を受け入れる」(404)のである。この「東方への移植」と「西方への志向」という「歴史の中の両極性」(403)が、オーストリア国家の存続可能性を支えるオーストリアの理念の本質である、とホフマンスタールはとらえている。

この両極性を保持し続けているオーストリアの理念が、オーストリアの歴史を可能にした。その歴史のなかで、

バーベンベルク辺境伯(筆者註 バーベンベルク家は976年レオポルト一世がオストマルクの辺境伯に封じられ、ハインリヒ二世時代ウィーンに宮廷を置き1156年独立の公領となり、東方への拡大政策をとったフリードリヒ二世が、1246年ハンガリーとの交戦で命を落とすまで270年にわたってオーストリアを支配した。)の行為、ハプスブルク王朝の行為、剣と防衛と、教会と領土拡張と、植民地化と音楽との行為が、非常に高次な総合へと結ばれる(404)

のである。そしてオーストリアの歴史が行使した「偉大な精神的な力が、繰り返し吹いてくる風のように、数世紀のあいだに強く絶え間なく東南諸民族の毛穴と骨の髄にしみこんでいった」(404)のであった。

「古いヨーロッパであるラテン・ゲルマン世界と新しいヨーロッパであるスラヴ世界との調停」(404)という「オーストリアの唯一の課題であり、^{レゾン・デットル}存在理由」(404)が、1848年から1914年のあいだ、ヨーロッパ人の意識の中で暗がりに後退する。このあいだヨーロッパ全体が民族主義問題に没頭し、民族国家の独立へと世論を準備したのであった。

そして第一次世界大戦をむかえて、オーストリア人のなかで「運命的なもの」(405)に対する意識が強まっていく。彼らは「ドイツの本質の中にヨーロッパ的なものをまとめ、もはや尖鋭ではないこのドイツ的なものとスラヴの本質の調停」(405)を目指すようになる。「断裂したものを宥和し、総合し、架橋する理念」(405)は「議論からではなく、状況から、民族主義者の、社会主義者の、議会制民主主義者のといったスローガンからではなく、真の経験から培われた」(405f.)との認識にホフマンスタールはいたる。彼のオーストリアに寄せる並々ならぬ期待が、それぞれの独立へと解体していくヨーロッパ世界の民族主義的潮流に対する、アンチテーゼであることが明らかになる。そしてこの主張、つまりオーストリアによるヨーロッパ世界の統合は、

さらに抽象性を帯びて、増幅されていく。

「いま新たに形作られようとしているヨーロッパは」(406)、「多様な東方をまとめるために」(406) 有機的な国家であるオーストリアを必要としており、「最高の精神的価値の領域や数千年の文化の決断においても、オーストリアはなくてはならない存在である」(406) とホフマンスタールはいう。そしてこのオーストリアが「有機的な国家」と呼べるのは、「それなしには生氣ある力の結合がありえない内的な宗教がその核心まで流れている」(406) からである。

4. 生の哲学——非合理性の由来

人間が人間を支配する場合に、支配者が伝統にもとづく権威であるかぎり、特権を行使することに対して、被支配者が疑念をおぼえることはない。したがって伝統的支配には、特別な論理はいらぬ。

しかしこの伝統的な支配体系に代わって国家が登場すると、権力の特権性は理由づけを必要とするようになる。これは以前からキリスト教国にはいえることだった。キリスト教は法と神の恩寵、掟と愛を対置しながら神の前での、神の子たる人間の前での地上的権力の有効性を疑問視したからである。したがってキリスト教徒にとって国家なるものは神からの委託なしには受け入れることができないのである。(プレスナー 97)

プレスナーのこの論述は、ヨーロッパの近代国家の形成に関する文脈で述べられたものである。つまりここまでわれわれが考察の対象としてきた時代よりも、少なくとも百年以上以前の状況に関する議論である。しかしホフマンスタールは大戦中のエッセイの中で、同じように国家による支配を神ならびに宗教と結びつけていた。

ホフマンスタールは『グリルパルツァーの政治的遺産』においては、ベーメンや世襲領もオーストリアの一部をなしており、多民族をも統一する国家オーストリアは、「神によって望まれた」所与のものであるという認識を示した。また『オーストリアの理念』においては、広範囲にわたる東部ヨーロッパをも包含するオーストリア帝国が有機的組織であるための精神的基盤として、また国家支配の核として、ローマ・カトリック教の浸透をあげていた。

しかし 20 世紀も十年以上が過ぎたこの時代に、支配原理として「宗教」を持ち出すのは、当時の合理的時代感覚ともおおいに齟齬をきたしていたことは想像できる。ところがこのようにホフマンスタールの国家支配の論理には、カトリックの宗教的権威をはじめとする、時代錯誤的な非合理性が貫徹されている。それではここでホフマンスタールがこのような非合理性を支持する背景を探ってみよう。

例えば、開戦後ひと月あまりたった 9 月 8 日に『ノイエ・フライエ』紙に掲載された『上流階級への要求』(1914) において、ホフマンスタールは上流階級における消費を促進している。こ

れは、社会の現実を分析したうえでの見解とも思えないが、戦争の先行きに対する楽観がその背後にあったと推量される。さらにホフマンスタールが「生産的であることは重要である。各人が各人の立場で。精一杯しうることを精一杯やる、誰もがその領域で、それが重要なことだ」(PIII 177f.)と主張するとき、あらゆる階級の誰もが、運命によって割り当てられた場所で、自分の義務を果たさなければならない、という階級社会を是認した、議会制民主主義とは相いれない、きわめて保守的なホフマンスタールの思いが語られている。

1927年に『国民の精神空間としての著作』講演においてホフマンスタールが自らの主張する理念の歴史的展開に「保守革命」という言葉を用いたことは周知のとおりである。たしかにここで保守主義をもちだしたのは、ボルシェヴィズムを代表とする革命的思想への敵対運動でもあったであろう。しかし本来の「保守革命」は、フランス革命への対抗措置ともいべきアンチヨーロッパ運動である。ホフマンスタールは「保守革命」運動の奔流を離れて、この語に「新しい中世」イメージを負荷している。つまりホフマンスタールの保守主義の背後には、ローマ・カトリック教の支配した封建的多民族国家「神聖ローマ帝国」イメージがあった。

ホフマンスタールの階級社会を是認した保守主義を支える、「保守革命」に匹敵するもうひとつの理論的背景として、ヴォルフラム・マウザーは、ホフマンスタールの大戦中の著述の中に、「生の哲学」の影響を認めている。(Mauser 167) 保守革命をフランスを代表とする先進ヨーロッパ思想の流入への抵抗運動、左翼革命的思想への敵対運動と呼ぶなら、——もちろん保守革命と類縁関係にある——もうひとつの保守主義である「生の哲学」はいかなる現象への対抗思想であったのか。

マウザーは、ホフマンスタールの講演のためのメモ『ヨーロッパの理念』(1917)の記述を引用し、ホフマンスタールの見解を以下のように展開する。人間は、神の被造物として本来は絶対的なものであるはずの自然を征服することに熱狂し、その結果、絶対性を否定するという意味での相対主義に陥っている。人類の地位の相対的な向上という思い上がりから、人間は「合理主義、学問信仰、技術の過大評価、物質的進歩への信頼により、生に満ちたものへの、生への関係を失った」(Mauser163)という。

マウザーによると、「神により創造された事物の品位への信仰」を否定する人間の「事物を創造する能力の確信」が、肥大した人間主義を多方面に拡散し、近代社会の散漫さを引き起こした。「[生]に対して開かれた姿勢」で臨まず「決めつけ (definitiv) を指針とし」,「精神的態度 (Geist) と志操 (Gesinnung)」をもたず、態度局面・機会にあわせた「目的志向」に身を委ねることが、社会全体の方向性を喪失させる。さらには「束の間の偶然、無思慮」(Mauser162)による「必然性」の認識欠如が、これに拍車をかける。

そしてこれらの近代の精神性の政治領域への反映が、社会を能率化してゆく中央集権主義、教皇に敵対し国家の絶対権を主張するヨーゼフ主義(筆者註 ヨーゼフ二世は神聖ローマ皇帝1765-90、中央集権的官僚制を整備し、非ドイツ系諸民族の反発を招く)、伝統によって培われた調和を破壊する自由主義であるとホフマンスタールが見なしているという。「民族の[生],[精神],

「本質」と相いれない「秩序、規範、合理性、成果思想、有用性への一面的志向、思想も意味も失ったあらゆる欲求を満たそうとする欲望」は、「自然を支配しようとする自我」を生みだし、「伝統的なもの」を破壊していく、というのがホフマンスタールの見解であるとマウザーは述べる。

政治における合理的精神の追求は、経済活動における物質主義と歩調を合わせ、科学技術にもとづいて生産性を飛躍的に向上させる。こうして生みだされた人間の無限の欲望は、人間の心に巢く、欲望をさらに抽象化していく。『ヨーロッパの理念』(1917)において、ホフマンスタールは人間が生との関係を失った原因として、金銭への飽くなき執着を指摘する。本来は価値の尺度であり、交換の手段であった貨幣が次第に目的物と化して、人間をその奴隷とならしめていく。つまりホフマンスタールが「生の哲学」によって対抗しようとしたのは、「目的思考、利己主義、合理主義、理解の不在、相対主義、偶然、実行可能と考える楽天主義」(Mauser163f.)を後ろ盾に、「貨幣経済」に支えられて、金銭を物神化していった資本主義社会である。

5. ホフマンスタールのハプスブルク帝国観に見られる生の哲学

「生の哲学」においては、本来個々人が、民族が、都市が、国家が生氣あふれる存在であるための指標は、必然性、生、精神であった。つまり目先の目的性を離れて、全体との調和を意味する「必然性」のもとに、現状と「合意」(Mauser162)する生き方が是とされる。そしてそのような「生」の中で使命として達成されるべきは「統一」と「全体性」とである。ここでいう「全体性」とは、単なる個の集合体ではない。個は単に全体の一部をなすのではなく、それ自体が有機体であり、「全体のあらゆる要素は全体のもつ普遍的性格を反映している」(Mauser165)。個自体が全体のもつ「普遍的性格」を実現し、個の集合体が「普遍的性格」を大きな規模で実現したのが「全体性」である。

このようなホフマンスタールの伝統に依拠した「必然性」と個が全体に対する関係を理解する手助けとなるのが、『建築せよ、撤去するな』(1915)における記述である。ここでホフマンスタールが、「様々な時代がそこから語りかけてくるにもかかわらず、都市は本来統一的なものである」(RAII 387)というとき、都市は調和的な構造をもった全体ととらえられている。都市は多様な時代からなる建築群ではあるが、そのときどきの新しいものが「いっそう高貴で品位ある刻印」(385)を担っているかぎり、つまり個として全体の普遍的性格を反映しているかぎり、統一を妨げることはない、という。

そして「都市は生であり、その美とその力はひとつである。都市の大通りや広場は生命体の四肢である」(388)。生物のような意味での生命を持たない都市ウィーンの構造をホフマンスタールは、明らかに有機体と捉えている。ところが現実には「時は金なり」とか「交通はすべてに優先する」(388)という標語のもと、「殺人者が心臓を切り刻み、目をくりぬく」(388)がごとくに、道路整備のために泉をどこかの袋小路に移設するなど、都市に作為的な手が加えられている。

しかしそれでも都市ウィーンにおいて、「多くのものは破壊されたが、多くのものは残っている。先祖によって刻印された全体の意味はまだ確認できる。部分はまだ、全体の魂が奪われるほどには碎かれていない」。(388) この先、都市が生き延びるかどうかは、「全体の魂」を維持できるかどうかにかかっており、「先祖の具体化した最奥の思想と感情」(389)に畏敬を懐くことによって成し遂げられるはずである。「慎みと品位、全体の精神への個の従属、意味と特徴のある家並みに対する感覚は、新たなウィーンの建築特徴に「……」建築上の作法を取り戻させる。」(389) 個々の建物の建築にあたっては、「全体の精神」を読みとり、都市を形成しなくてはならない、というのがホフマンスタールの主張である。

ホフマンスタールのハプスブルク帝国観は、個と全体とのこの同じ図式を民族と中部ヨーロッパに敷衍したものである。個にあたる民族は、普遍的性格の反映である内的「必然性」にもとづいて、自己の民族を発展させてゆく。もちろん世界の中における民族の「必然性」にもとづく発展とは、民族としてのアイデンティティーの確立ではありえよう。しかしそれはけっして民族国家の独立を意味するわけではない。あくまで伝統に立脚したハプスブルク帝国の枠内にとどまることに「必然性」は存する。

ホフマンスタールの考えではおそらく、帝国内部で「必然性」をおびて発展し、アイデンティティーを確立した民族は、全体のもつ普遍的性格を理解すべきであり、ハプスブルク帝国のもと「統一」へと向かうべきである。独立した有機体をなす「個」である民族が、「統一」へと向かい、個々の有機体が統一されたとき、最終的に成立するのが「全体性」である。したがってホフマンスタールが考えていたハプスブルク帝国の理想像は、オーストリア人と中部ヨーロッパ地域の民族との共生が、これらの複数民族をオーストリア人が「統一」して「全体性」を確立することによって、達成されることなのである。

註

本稿は日本グリンバルツァー協会・研究発表会(2007年12月9日、キャンパスプラザ京都)における招待講演「ホフマンスタールの第一次世界大戦——その社会的・文化的視点」に基づいている。

略号 PIII と直後の数字は、Hofmannsthal, Hugo von: *Gesammelte Werke in Einzelausgaben Prosa III*. Frankfurt a.M. (Fischer) 1952. の頁数を表す。

略号 RAII と直後の数字は同様に、Hofmannsthal, Hugo von: *Gesammelte Werke in zehn Einzelbänden. Reden und Aufsätze II*. Frankfurt a.M. (Fischer) 1979. の頁数を表す。

なお、一連の箇所においては、煩瑣になりすぎないように頁数のみ示した。

その他の引用は、以下の参考文献からである。筆者名と頁数を本文中に記した。

参考文献

- Stern, Martin: Hofmannsthal und das Ende der Donaumonarchie. in: Pestalozzi, K./ Stern, M. : Basler Hofmannsthal-Beiträge. Würzburg (Königshausen und Neumann)1991.
- Rider, Jacques le: Hugo von Hofmannsthal. Historismus und Moderne in der Literatur der Jahrhundertwende. Wien (Böhlau) 1997.
- Mauser, Wolfram: Hugo von Hofmannsthal. Konfliktbewältigung und Werkstruktur. Eine psychosozioologische Interpretation. München (Wilhelm Fink) 1977.
- Perrig, Severin: Hugo von Hofmannsthal und die Zwanziger Jahre. Frankfurt a.M. (Peter Lang)1994.
- プレスナー, ヘルムート: ドイツロマン主義とナチズム 遅れてきた国民 講談社学術文庫 1995年
(2008年9月28日受理)
(あおじ はくすい 文学部准教授)